

大聖院：勅願堂

勅願堂は大聖院の本堂で、仏教の五大明王の一尊であり大聖院の本尊でもある不動明王像が安置されています。当初の勅願堂は、12世紀に宮島を訪れた鳥羽天皇（1103～1156）の命により建てられたもので、大聖院の敷地内で最も古い建造物でした。勅願とは「天皇の祈り」を意味し、特に領土全体の平和と繁栄を願うことを指しています。現在の勅願堂は1910年に再建されたもので、その目玉となっているのは、真言宗で広く崇拝されている凄まじい外観の神・不動明王が「波を切る」姿で描かれた波切不動明王の木像です。

波切不動明王の伝説には、真言宗の開祖であり大聖院を建てた人物であるともされている仏僧の空海（774-835）が、留学先の中国から帰国する際に嵐に巻き込まれた経緯が語られています。周りで海が荒れ狂う中、空海は霊木から不動明王像を彫り上げました。するとたちまちこの恐ろしい神が波を鎮め、空海は無事に故郷へと戻ることができたそうです。

波切不動明王は16世紀の大名、豊臣秀吉（1537～1598）にাগめられており、1592年の朝鮮出兵時には、秀吉は自らの守護神として、船に波切不動明王像を乗せて行きました。現在勅願堂に安置されている像は秀吉により寄贈されたものであると言われており、海を渡らなければ上陸できない宮島への旅行者を守ってくれると信じられています。また勅願堂の四隅には、五大明王の残りの四尊である降三世明王（東）、軍荼利明王（南）、大威徳明王（西）、金剛夜叉明王（北）の像があります。勅願堂を出た後は、数種類ある絵馬に神々への願い事や祈りを書いて、勅願堂の横の壁にかけることができます。絵馬はそこに展示された後、次の祈祷の際に焚き上げられます。